



内藤 廣 ないとうひろし
建築家・東京大学大学院教授

[略 歴]

- 1950 神奈川県生まれ
- 1974 早稲田大学理工学部
建築学科卒業
- 1974-76 同大学大学院修士課程修了
- 1976-78 フェルナンド・イゲラス建築設計事務所勤務(スペイン)
- 1979-81 菊竹清訓建築設計事務所勤務
- 1981 内藤廣建築設計事務所設立
- 2001 東京大学大学院工学系研究科
社会基盤学専攻助教授
- 2003 同大学教授

[主な作品]

- 海の博物館(三重県)＝芸術選奨文部大臣新人賞、日本建築学会賞、第18回吉田五十八賞
- 安曇野ちひろ美術館(長野県)
- 牧野富太郎記念館(高知県)＝第13回村野藤吾賞、IAA国際トリエンナーレ グランプリ、第42回毎日芸術賞、第42回BCS賞
- 倫理研究所 富士高原研修所(静岡県)
- 島根県芸術文化センター(島根県)

石州瓦の未来

石州瓦の性能の高さについては、一般にあまり知られていません。釉薬がかかった瓦が積雪に対して強いことは容易に想像が付きまます。しかし、それ以上のことは、建築や都市を専門にする人でも、山陰地方の風景の特徴の一つ、ということぐらいの知識でしょう。かく言うわたしも、島根県芸術文化センターの設計に取りかかるまでは、それぐらいの知識しかありませんでした。

実際に使うことになって、素晴らしい素材であることが次第に分かってきました。伝統的建築物で使われていた百年前の瓦の多くが、そのまま再利用することが出来ることに驚きました。高い温度で焼かれ、なおかつ釉薬に混ぜられた来待石の成分が溶け出してガラス質のコーティングがされる。これは素晴らしいとしか言い様のない先人の知恵です。こうして生み出されたこの地ならではの素材と技術が、この地方の風景をつくり出したことにも心を打たれました。

大切な公共建築物ですから、高い耐久性が求められることは言うまでもありません。ところが、近代的な建築材料の多くは、技術の繊細さや現代性を誇るばかりで、百年単位の長い年月を耐えることに関心を払っていません。そこで、この建物では先人の知恵を活かし、屋根も壁も石州瓦で覆うことにしました。

一つだけ問題がありました。これまで誰も壁に瓦を使ったことがないことです。幾つか特殊な例はありますが、汎用品をベースにこれほどの規模の壁に使われるのは世界で初めてです。模型を幾つもつくり、装置を使って実験を繰り返して実現に漕ぎ着けました。サンプルの壁が出来上がってみて驚きました。釉薬のガラス質が空の色を映し出して千変万化するのです。これは予想外のことでした。建物が立ち上がり、巨大な外壁が姿を現しました。誰も見たことのない美しい壁です。陰影に富んだ山陰の空を豊かに映し出しています。それも高性能でメンテナンスの必要がなく、百年単位の風雪に耐える壁です。

本当の美しさは、技術を誠実に練り上げる中で自ずと生まれてくるものであることを実感しました。このまたとない素材をさらに発展させていただくことを希望します。



島根県芸術文化センター
写真提供:内藤廣建築設計事務所